

論文の内容の要旨

論文題目 近代イギリスにおける技芸 (art) の振興 — 「デザインの技術」教育の展開過程—
氏 名 松坂 雅子

本稿は、近代イギリスにおいて、人間の技能の教育の問題が、「デザイン」の問題と結び付けられ、デザイン学校 (School of Design) 設立など意匠性に関する政策として立ち現れた要因を明らかにするものである。この取り組みは、当時の語でいえば「デザインの技術」(arts of design) を教育する動きであった。「デザインの技術」とは、ルネサンス期に画家ヴァザーリ (Giorgio Vasari) が提唱した「ディゼーニョの技 (arti del disegno)」に由来している。ヴァザーリは、フィレンツェにアカデミア・デル・ディゼーニョ (Accademia del Disegno) を設立した人物で、西欧各地ではこれを模範に美術アカデミー (academies of art) が作られた。イギリスで美術アカデミーは 1768 年にロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ (Royal Academy of Arts of London) として設立された。これらロイヤル・アカデミーなどの美術アカデミーでは、美の原理を幾何学や黄金比など科学的見地から定式化し、その美を遠近法や光学を用いて絵画・彫刻・建築を通じてどう表現するかが課題であり、「デザインの技術」はそのための技芸であった。

イギリスの技術教育史についての従来の研究では、技術教育への取り組みが「デザインの技術」教育に起源があることは重視されてこなかった。従来は、19 世紀末に後発工業国の経済的な追い上げへの焦燥感から技術教育のあり方が見直され技術教育制度の整備を求める声が高まったことが、背景的な要因として重視されてきたのである。むしろ 19 世紀末も技術教育が推進された契機として重要ではあるが、他国の経済的伸長が表面化するより前、19 世紀前半から、デザイン学校の設立を端緒として技術教育政策は開始されており、さらにその思想的基盤が成立した時点に遡れば 18 世紀に認めることができる。したがって、技術教育に取り組まれた根源的な要因を明らかにするには 19 世紀末では不十分であり、それ以前に遡らねばならない。起源を遡求する際には、同時に、18 世紀から連続的に「技術教育」がずっと同質のものとして理解されていたわけではないため、技術教育の内容や、教育の内容を規定する技術観に変容があった面を考察することも必要となる。

そこで、第 1 章では、まず技芸観の変遷を概観するために、18 世紀後半から 20 世紀初頭に、art という概念がどのように変容したのか、四期に時期区分をして論じた。第 I 期が 18 世紀後半、第 II 期が 19 世紀前半、第 III 期が art の変容期である 19 世紀中葉、第 IV 期が 19 世紀末～20 世紀初頭である。この時期区分は論文全体で用いられることになる。第 1 章が明らかにしたことは以下の四点である。第一に、実用と教養の関係の捉え方は変化しており、当初は両者が対立的なものではなかったが、次第に実用か教養かの二者択一に離反していった。第二に、技芸振興の目的には変化が見られ、当初は職人の主体的な判断力の形成が目的であったが、19 世紀中葉以降は、

その言説は見られなくなり、むしろ、現状の判断の結果が多様でばらつきがあることが問題視され、それらを統一するための基準作りが目指された。第三に、当初は技芸振興の基本として捉えられていた描画の重要性が低下していき、19世紀中葉以降は、より「実用的な」教育が必要であると考えられ求められるようになった。第四に、輸出額などで見ると絹織物は微々たるものではあるが、絹織物にはそういったもののみでは計り知れない、技芸の水準の象徴としての重要性が認識されていた。

第2章では、18世紀後半（＝第Ⅰ期）に技芸振興の基盤が成立していく過程を論じた。デザイン史＝モダン・デザイン史として論じられることがほとんどである研究史上においては、従来、「デザインの技術」教育政策が開始された19世紀前半（＝第Ⅱ期）がデザイン史の開始時点として重視され、それ以前については十分に検討されてこなかった。しかし本論文では、18世紀後半（＝第Ⅰ期）に思想的な基盤が成立し、基本的な技芸振興の考え方として後々まで影響したことを重視している。第Ⅰ期には、技芸の振興が、美術にも製造業にも共通の基盤とされていたこと、また、大きな画期となったのが、18世紀後半のバーク（Edmund Burke）やヒューム（David Hume）による「趣味（taste）」論であることを論じた。趣味論では、人間誰しも美的判断能力である「趣味」を内面に持っていることが前提とされたうえで、その趣味を向上させることの意義が論じられた。また、元々第Ⅰ期より描画の意義が重視されていたために、第Ⅱ期に基礎的教育として描画を重視する「デザインの技術」教育が普及する素地が整っていたことを明らかにした。このように、第2章では、技芸振興という、18世紀以降イギリスの教育制度の底流にあり続けた長期的かつ基本的な発想を捉えた。

続く第3章、第4章は、第Ⅱ期に設立されたデザイン学校（School of Design、現在のRoyal College of Art）を題材としている。第3章は、第2章で論じた技芸振興の発想が実際にデザイン学校設立という形で表れることになった理由を検討した。まず当時、design という語が意味した内容を検討した。ここで明らかにしたのは、第一に、技芸の象徴であった意匠性の高い絹織物はほとんどが紋織物（＝無地の織物に後から捺染で図柄が表現されるのではなく、多色の色系によって図柄が織り出される織物）であり、この時の「デザイン」とは、紋織物の紋意匠図（方眼紙）に図案を変換すること、ないし、変換されたもののことを指した。第二に、「デザイン」というと現在は、何らかの創造的行為が想起されるであろうが、当時は、画家や著名な図案家がすでに作った既存の図案を用いて「デザイン」が作られることが多かった。第三に、19世紀以降普及するジャカード織機は意匠に関わる技能を職人から疎外したとしばしば位置付けられてきたが、ジャカード織機以前から永らく紋織物を織るために使われていた空引機の時と比べても、分業のあり方についての違いは検出されない。この視点からも、これまでの研究では第Ⅱ期がデザイン史の始まりとして過剰に強調されてきたが、実際は、第Ⅰ期と第Ⅱ期の連続面が強いことがいえよう。さらにこの章では、第Ⅱ期にデザイン学校が設立されたのは、分業体制の変化や機械化など意匠に関わる実態面の変化を受けてのことではなく、1820年代に絹織物の輸入が解禁されイギリス絹業に対してそれまでの保護政策に取って代わる政策が講じられたことによっており、自由貿易政策が引き金となって行われたことに言及した。つまり、デザイン学校の設立は、教育それ自体

に内在する問題から取り組まれたのではなく、外在的な問題である貿易政策との兼ね合いで行われた。

第4章では、初期のデザイン学校の校長を務めていた画家ウィリアム・ダイス (William Dyce) の教育論を取り上げることで、第Ⅱ期に設立されたデザイン学校の狙いを浮き彫りにすることを試みた。ダイスは、デザイン学校の校長となる以前、スコットランドで製造業にとって必要な技芸の教育制度を提言しており、この内容がロンドンのデザイン学校側にも有力視され、校長として招聘された人物である。したがって、ダイスの教育思想はデザイン学校の狙いと合致していたものであり、第Ⅱ期のデザイン学校の方針を知ることができる。ダイスは、デザイン学校校長に就くことが決まったのち、プロイセンやリヨンなどの教育制度の視察に出向き、報告書にまとめた。本章ではこれらの史料を手掛かりにしてダイスの教育思想を明らかにし、デザイン学校の方針を明確にした。ダイスは、第Ⅱ期に務めたデザイン学校校長を退いたのち、第Ⅲ期に、「ミドル・クラス」教育の提言に関わっており、本章ではこの時期のダイスの言説も取り上げた。これにより、第Ⅱ期においては、「デザインの技術」教育の目的は、製品の意匠性を高めるためであったり、機械業など製造業の過程で必要な図面作成に資するものとするためであったりと、あくまで製造業従事者を対象にしたものであったが、第Ⅲ期においては「ミドル・クラス」一般が対象とされ、より広い層に対して有効であると位置付けられていったことを示した。

第5章では、時代を下り、世界初の万国博覧会である1851年のロンドン万博に着目した。ロンドン万博は、概して、イギリス経済の繁栄の象徴とのみ見られてきたが、実態は、第Ⅰ・Ⅱ期の技芸観を引き継いで開催され、技芸振興の延長と位置付けられる出来事である。万博では、万国規模で物品が集められ、技術力と趣味を体現した意匠を示す物品が万博の審査員により評価され賞が授けられた。ロンドン万博は、視覚面から物の良し悪しが判断されることを多くの人が目の当たりにした重要な契機であったと考えられる。このような大々的な視覚的教育への取り組みにより、多様であった「デザイン」の意味合いの中でも「意匠性」の重要性が高まっていったといえる。

本論文は、近代イギリスにおける技芸観の変容を検討した。それにより、いかなる教養、いかなる技術が実用的であるのか、また、ある技術は精神的・知的営みであるか身体による営みなのか、これらの区分は思想上のものであり流動的で、時代によって対極のものにも位置付けられるということを確認した。また、これはそもそも、何を「実用」とするかが様々だったことにも起因している。製造業で最終的に表れる意匠は、「趣味」と共に技術水準も体現すると捉えられていたゆえに、「デザインの技術」の振興は18世紀から実用的でもありかつ教養的な意義もあるものとして取り組まれた。